

## 《史料翻訳・解説》

## オートンのエウメニウスによる学校再建を求める演説

西村昌洋

本稿では、*Panegyrici Latini*『ラテン語称賛演説集』中に残された演説の一篇、ガリアのオートン（古名アウグストドゥヌム）にある修辞学の学校を再建しようとする同オートン市の名士エウメニウスが3世紀末に発表した嘆願演説について解説し、その全文の試訳を行う。この作品は、ガリアにおける「ローマ化」の進展やラテン修辞学が教育される文化的環境の一端を示すものとして、あるいは、テトラルキア時代の政策や皇帝・宮廷とガリア属州民との関係を伝えるものとして、重要かつ有名なものである。

*Panegyrici Latini* <sup>1)</sup>

この演説が含まれている *Panegyrici Latini* とは、パネギュリクス *panegyricus* と呼ばれる演説12篇を伝えるもので、トラヤヌスに捧げられた小ブリニウスによる1篇に加え、コンスタンティヌス（ナザリウス作）、ユリアヌス（クラウディウス・マメルティヌス作）、テオドシウス（パカートゥス作）に捧げられた3篇、そして300年前後頃のおよそ1世代間にガリアで発表された8篇から成る。パネギュリクスとは、特定人物の功績や人格を称賛するための、文学的引用や政治的ほめかしの多い演説のことである。特に古代末期には、帝国の公的祝典の場で、たとえば、ローマ市生誕の日（4月21日）や皇帝の即位記念日（*dies imperii*）、それからコンスル就任式（1月1日）のような場で、ローマ皇帝の業績を称える皇帝用のパネギュリクスの存在と重要性が知られている。本稿で扱う1篇は例外だが、*Panegyrici Latini* に収められた残りの11篇は全て皇帝に捧げられたパネギュリクスである。公式の式典におけるパネギュリクスの発表は、西方ラテン語圏・東方ギリシア語圏を問わず、当時は広く行われていたようであり、雄弁家・修辞学者が自らの才能を公に示すと同時に属州総督や帝国官吏として取り立てられる知遇を得るための機会でもあった。こうした事情のため、パネギュリクスの内容は雄弁家個人の事情や文学的な趣味嗜好のみならず、当時の帝国の政治的なイデオロギーやプロパガンダを含むことが多く、修辞学の作品というだけでなく政治的言説としても分析する必要がある。本稿で訳出するエウメニウスの作品は皇帝に捧げられたパネギュリクスではないが、後述するようにエウメニウス自身がもとは宮廷官吏だったこ

と、そして、他の皇帝頌辞と共に残されていることから分かるように、パネギュリクスの様式を踏襲した作品であり、他の作品と同じ知的・政治的環境で作成され機能したことは確実である。つまり、それは300年前後頃の、宮廷がガリア地方に留まっていた時期の環境ということである。

3世紀の半ばに外民族の侵入と攻撃に曝され、一時は分離帝国も出現したガリアは、治安を取り戻しかつ国境線を維持するために皇帝の存在を必要としていた。284年に小アジアで皇帝に選出されたディオクレティアヌスは、翌年に単独支配を達成すると、即座に自分の同郷人にして戦友であるマクシミアヌスをカエサル、副皇帝としてガリアに送り込んだ。バガウダエと呼ばれるあまり実態の分からない反乱集団を鎮圧した後に、マクシミアヌスはディオクレティアヌスと形式上は同等のアウグストゥスすなわち正皇帝に昇格された。また、ディオクレティアヌスは自分にはヨウィウス（ユピテルの後裔）、マクシミアヌスにはヘルクリウス（ヘラクレスの子孫）という神聖称号を用い、自らの統治に宗教性を付与すると同時に伝統的な往古の威信の回復を目指すことを強調した。この点は、同時代のパネギュリクスや貨幣の銘に痕跡をとどめている。マクシミアヌスはライン川防衛線の維持には成功したものの、287／8年に篡奪帝カラウシウスのもとで分離したブリテン島と低地地方を再回復することには失敗した。293年、西にコンスタンティウス、東にガレリウスという二人の副皇帝が追加されテトラルキアが始動すると、マクシミアヌスはガリアを離れ、代わりにコンスタンティウスがガリア方面を担当することになる。ブリテン島の再奪取は296年にこのコンスタンティウスによって達成される。四人の皇帝による共同統治は3世紀末には軍事的成功を見ることになり、エウメニウスの弁論はこうした政治情勢の中で発表された。*Panegyrici Latini*のうちディオクレティアヌスの治世に属する4篇は以上のような、皇帝の存在感が強い時期のガリアで発表されたものであり、その文面からは修辞学を修めたガリアのエリート層とトリアに置かれた宮廷との間で接触があったことが窺われる。290年代に生まれた両者間の関係は、続く10年の間、コンスタンティヌス治世初期に属するパネギュリクス4篇が残されていることから分かるように、維持されていたように思われる。

### エウメニウスによる演説について

本稿で訳出を試みるエウメニウスによる演説は、*Panegyrici Latini*のうち9篇目に残されている（*Pan. Lat.* IX(V)<sup>21</sup>）。この演説は、エウメニウスという人物が、名称不明の属州総督およびオータンやリヨンのような町から来たガリアの有識者・名士を前に、自分の給金を元手にオータンの修辞学の学校、マエニウス学校<sup>3)</sup>を再建することを訴えるものである。

#### (1) 作者エウメニウス

ディオクレティアヌス治世初期からコンスタンティヌス治世初期にかけてガリアで発表

された8篇のパネギュリクスはエウメニウスのものを除いて作者名が不詳であるが<sup>4)</sup>、この演説だけは、ラテン語テキスト自体の中に引用されている宮廷から届いた書簡の末尾に呼格として名前が出てくることから、作者名が知られている。「我らが親愛なるエウメニウスよ、健やかであれ (Vale, Eumeni carissime nobis)」と (14.5)。同時に、やはりテキストの内容から彼の個人的な経歴もいくらかは知ることができる。

エウメニウスは、オートンを「私の故郷 (mea patria)」と述べていることから分かるように、オートンの出身である (2.1, 11.3)。彼は、修辞学・雄弁術を修めたが、フォルムでの激しい議論（訴訟時の法廷弁論だろうか）に加わることは避け、もっぱら教師として修辞学を仕事にしてきた (1.1-2)。しかし、詳しい過程は不明ながら、エウメニウスはガリアのトリア宮廷でマギステル・メモリアエすなわち書記局長官 (magister memoriae) を務めている。当時、書記局の中で最重要ポストだったのがこのマギステル・メモリアエであり、298年東方のマギステル・メモリアエであるシコリウス・プロブスはペルシアとの和平交渉に当たっている。マギステル・メモリアエは司法や外交を担当する官吏であり、その地位は重要なものだった<sup>5)</sup>。ただ、エウメニウスはこのマギステル職から解かれ、故郷の学校で再び修辞学の教師となるよう言い渡されたようである。その際、マギステル時代の給金 30 万セステルティウスの倍額 60 万セステルティウスの給金と、マギステル職に伴う特権の維持を約束されている (6.2-3, 14.3-5)。おそらく彼がマギステル職に就いていたのは、コンスタンティウスが副皇帝になった 293 年頃から、この演説が発表された 290 年代末年までの数年間だろう。マギステルという高級官吏になるまでに、中・下級のポストを経験したのかもしれないが、その前歴は不明である。研究者によってはこの人事は事実上の左遷であり、エウメニウスは不満気であると考えている者もいる<sup>6)</sup>。時代は下るが、ユスティニアヌス時代の官吏リュディアのヨハネスもカッパドキアのヨハネスによる官僚機構のリストラにより出世の見通しが暗くなった後、543 年にユスティニアヌスの命によりコンスタンティノープルでラテン語教授職に就いている<sup>7)</sup>。もしかして、ラテン語教授とは、用済みになった官吏を体裁よく追い払うにはうってつけの天下りポストなのだろうか。もう一つ問題となるのがエウメニウスの引退後の待遇である。「汝の顕職の特権を保ったままで (Saluo … priuilegio dignitatis tuae)」という表現から (14.4)、マギステルという高位に伴う特権、おそらく出身地での雑多な公共奉仕を負担する義務 (munera sordida) からの免除権が、退職後も維持されることになったと思われる。60 万セステルティウスという給金に関しては、この支払いが退職時に一時的に支払われる下賜金なのか、それともラテン語教授の給金として毎年支払われるものなのか、そして、この給金はローマ帝国の国家から支払われるものなのか、それとも実際にはオートン市の財政から捻出されることになるのか、といった議論がある<sup>8)</sup>。これが一時的な退職金なのかどうかは、特に決め手となる証拠がないので保留にせざるをえない。この給金の出所に関しては、いくらか推測が可能である。エウメニウスはこの 60 万セステルティウスを使ってオートンの学校を再建しようとしているのだが、本人が言うには、こ

の再建事業は「公の出費なしで (*sine sumptu publico*)」可能であり (11.1), また, この 60 万セステルティウスに言及する際には, これは「国家の財力から (*ex rei publicae uiribus*)」のものだと念入りに述べているため (11.2, 14.5), おそらくオートン市の懐は痛まなかったのではないだろうか。もっとも, 属州総督や属州の名士たちの面前でエウメニウスが嘘をついているとか, あるいは, 念を押しているということは逆が真であるとも考えることも可能ではあるが<sup>9)</sup>。

エウメニウスについてはその家族についてもいくらか情報が得られる。エウメニウスの祖父はアテナイの出身であり, 修辞学者・雄弁家としてローマ市に滞在した後, どういうわけかガリアのオートンにまで足を運び, その地に留まったという。エウメニウスが建て直そうとしている学校は, まさにこの祖父が 80 歳を過ぎても教鞭を執っていたという学校である (17.3-4)。エウメニウスの親については言及がない。最後に, エウメニウスには少なくとも息子が一人おり, オートン市の修辞学校の教職にも本来はこの息子を就かせる予定だったようである (6.2)。エウメニウスは今何歳なのだろうか。エウメニウスが少年期に入るより前にこの学校での勉学は中断されていたというくだり (17.3) から, Galletier はこの中断は「ガリア分離帝国」の皇帝テトリクスによるオートン攻囲の時 (269 / 70 年) のものと判断して, エウメニウスは 264 年か 265 年の生まれだと考えている。祖父の死は 250 年から 260 年の間であり, そこから逆算してアテナイで生まれたのは 168 ~ 178 年の間, というのが Galletier の説である<sup>10)</sup>。しかし, Nixon-Rodgers が指摘するように, これだとエウメニウスはわずか 30 歳ほどの若さでマギステル・メモリアエという高級官吏に就いたことになるし, 修辞学の教授を任せられる歳の子供がいたとは考えにくい。Nixon-Rodgers は, 学校の中断はオートンの攻囲とは無関係であり, エウメニウスの誕生は遅くとも 250 年, おそらくもっと以前に生まれていると想定している<sup>11)</sup>。A. Klotz は 240 年頃の生まれではないかと想定しており<sup>12)</sup>, これならエウメニウスは 60 代手前くらいであり, 成人した息子を持つ元高級官僚としてありうる年齢である。この場合, 祖父の生まれは更に遡り, 150 年頃になる。

## (2) 演説発表の日時および場所

この演説がいつ発表されたのかを正確に知ることはできない。皇帝用のパネギュリクスならば, 通常, 皇帝の即位記念日やコンスル就任式典のような日付が特定できる文言がテキスト中に含まれているのだが, この作品は皇帝に捧げられてはいないのでこうした言及はなされていない。ただ, 最末尾にテトラルキアの四皇帝の業績を称える箇所があり (21.2), ここからある程度年代を絞ることができる。次の 4 点が問題となる。

1. ディオクレティアヌスがエジプトでの反乱を鎮圧した後。
2. マクシミアヌスがアフリカでムーア人を撃破した後。
3. コンスタンティウスがブリテン島を再奪取した後。
4. ガレリウスが対バルシア戦争で攻勢に出た後。

まず、3. はテキストの内容からしても確実である。しかし、残りに関してはテキストの表現自体の曖昧さと、この時期の年代特定がそもそも全体的に困難であることから、見た目はど決定的ではない。エジプトの反乱は二段階に分れるためどの時点のものを指しているのかが分からない。マクシミアヌスのアフリカ遠征とガレリウスのペルシア遠征も終結しているのかどうか、読み取ることはできない。Galletier はマクシミアヌスのアフリカでの戦闘もガレリウスによるペルシア遠征も既に帰趨が決したものとみなして、主だった戦争が終結した298年春という時期を想定している<sup>13)</sup>。一方、Nixon-Rodgers は、コンスタンティウスによるブリテン島奪回は既になされたものであるが、残りの軍事行動は始まったばかりととれるし、既に終結して時間が経過しているようにも読めることから、297年以前ではありえないが、第一テトラルキアが終結するまでの間ならいつ読まれたとしてもおかしくない、という慎重な見解を出している<sup>14)</sup>。以上のことから、少なくともブリテン島の回復よりは後であり、かつテトラルキア体制による帝国防衛が上手く機能したという実感が持てた時期、290年代末年の可能性が高いと言えそうである。

この演説が発表された場所についてはこれまでほとんど疑いが持たれることはなかった。オートンにある学校の再建を問題にしている以上、当然オートン市内での発表であろう、と。この演説の名目上の献呈相手は、テキスト中 *uir perfectissime* と呼格で呼びかけられる人物、おそらくこの地域を含む属州ルグドゥネンシスの総督である<sup>15)</sup>。つまり、この総督がオートン市を行政監督のため巡察で訪れた時に読まれた、と。ただ、B. Rodgers はテキストの検討から、発表場所はオートンから離れた町ではないかとの見解を出しており、この場合、可能性が高いのは総督が役所を構える町リヨンであり、エウメニウスの方が総督のもとを訪れてこの演説をぶったことになる<sup>16)</sup>。発表場所がオートンであれリヨンであれ、少なくとも、この演説がガリア中央部の一地域のローカルな文脈の中で機能していたことだけは確かである。

### (3) 演説の概要

全体の長さであるが、試しに日本語訳を声に出して通読してみたところ、40分強かかった。演説として読んで聴かせるものであることを考慮すると、もう少しゆっくりと読むべきかもしれないが、おそらく1時間を超えることはあるまい。人間の集中力には自ずと限界がある。

この演説の目的は、既に述べたように、オートンにある修辞学学校の建物の再建を訴えること、あるいは、そうすることでオートン市の名士としてのエウメニウスの地位と名誉を公に示すこと、である。この嘆願が受理されたのかどうか、学校がこの後どうなったのか、あるいはこの演説がなされるより前に実は既に学校の再建は決定済であったのか、こうした点は不明である。なお、修辞学学校の再建と教養の価値を訴えるこの演説を作成する際に、エウメニウスが利用したと指摘されているのが、文芸の擁護論として知られるキケロの『アル

キアス弁護』であることを付言しておく。

演説の構造は以下の通り。

導入部：エウメニウスがこの演説を行うことについての断り（1-2）

提題と分割：演説の動機（修辞学学校の再建嘆願）、演説の主題を二つに分けると宣言（3）

主題1：学校再建の動機について（4-10）

主題2：学校再建の手段について（11-19）

結尾：帝国の繁栄の祈願、エウメニウスの意思を皇帝に上奏するようお願い出る（20-21）

## オータンとローマ帝国

最後に、この演説で大きな位置を占めているオータンについていくらか述べておきたい。オータンに住まうアエドゥイ族（カエサルのテキストではハエドゥイ族）は本来ガリア中部にいた部族であるが、共和政期からローマに対し友好的であり、「ローマ人の兄弟」と呼ばれたほどで、この点はエウメニウスやその他の無名弁論家たちも強調している<sup>17)</sup>。元々、丘陵に築かれたピブラクテを拠点としていたが、アウグストゥス時代に築かれたアウグストドゥスム（アウグストゥスの砦）つまりオータンに移っていった。帝政前期から既に長大な市壁や劇場、円形闘技場などの公共施設で知られており、特に本稿との関連では、タキトゥスがほんのついで程度に言及する、ガリア人貴族の子弟たちがラテン語を学びに来ていたという修辞学の学校の存在が注目される（タキトゥス『年代記』3.43）。ただ、この学校とマエニウス学校との関連は不明である。こうしたことから、オータンはガリアにおける「ローマ化」や修辞学教育の中心であったとみなされているが、史料が乏しいためその実際はほとんど不明である。

オータンが政治史の文脈に再び姿を現すのは3世紀の半ば、いわゆる「ガリア分離帝国」の時代である。ガリエヌスの時代にポストゥムスのもとで帝国中央部から離脱したこの分離政権に対し、オータンは反旗を翻し、本家のローマ皇帝クラウディウス・ゴティクスへの支持を表明し、救援を求めた。オータンがこうした行動に走った理由は定かではないが、この結果、オータンはガリア側の軍隊により包囲攻撃を受け、270年にはテトリクスにより制圧された。この時、オータン市は物理的な損害を被るとともに、名望家層のいくらかは財産を失いオータンを追われた。この時オータンから亡命した人物の一人が、カエキリウス・アルギキウス・アルポリウス、後のボルドーのアウソニウスの母方の祖父である（Ausonius, *Parentalia* 3）。こうした破滅的な状況からの復興はテトラルキアの時代に着手されることになる。

*Panegyrici Latini* のうちエウメニウスを含む4篇の作者は自らがオータン人であることを明らかにしている。これらからは、コンスタンティウスとコンスタンティヌス父子の時代にオータン市がトリアの帝国行政府から特別な配慮を受けていたことが分かる。その内実は、

テクストから知られる限りでは、市内の公的・私的建築物の再建、住人の補充、そして減税措置である。もう一つ、この時期のオートンとトリア宮廷との結び付きを示唆しているのが、修辞学教養と行政官職との関連である。297年の無名オートン人弁論家は、エウメニウスと同じように、学校の教師であると同時に宮廷で官吏となってもいた。そして、310年のやはり名の伝わらぬオートン人弁論家も、元は宮廷官吏であり、その息子は310年時点で国庫の管理官を務めており、さらに、多くの自分の弟子たちが宮廷や属州で行政運営に当たっているとも述べている。こうしたことから、この時期オートンの修辞学学校はトリア宮廷やガリア属州で勤務する官吏の養成所のようになっていたのかもしれない。エウメニウス自身もまた、マエニウス学校を卒業した者が行政職に就く可能性があることを示唆している(5.4)。帝国の総督や官吏となるためには、修辞学あるいはローマ法を修めていることが必須条件だった。中国の科挙のような試験があるわけでも現代の大学のような明確なカリキュラムがあるわけでもないが、オートンは安定した人材供給源としての位置を得ていたのかもしれない。ただ、オートンがこうした特権的な地位を享受していたのはコンスタンティヌス治世初期までであり、それ以後4世紀を通じてオートンが何らか重要な役割を果たしたことは知られていない。とにかく、このエウメニウスの演説からだけでも修辞学の習得・教授と帝国行政ポストとの関連は明らかである。ある研究者が言うには、修辞学の素養と宮廷内のポストとの結合が最も明白に現れているのは、300年前後頃のガリアの弁論家の事例なのである<sup>18)</sup>。同時に、このような事例は、後期帝政に非常に顕著となる、修辞学教養の重要性やその帝国行政職との関連の予兆と言ってよいだろう<sup>19)</sup>。

もう一つ注目すべきは、オートン人による過去の利用という点である。オートンの名望家たちは、ガリアに長期にわたって滞在することになった帝国行政府に対してアプローチする際、自分たちの祖先が過去に持っていたローマとの関係を引き合いに出す。オートン人は、アエドゥイ族がローマ人との協力関係から「ローマ人の兄弟」という名を得たという故事を誇りとしている(キケロ『アッティクス宛書簡集』1.19.2, カエサル『ガリア戦記』1.33等参照)。共和政末期には、アエドゥイ族のディウィキアクスがローマ市を訪れて元老院に救援を求め、カエサルとも友好関係を持っていた(カエサル『ガリア戦記』1.19, 1.31, 6.12等, *Pan. Lat.* V(VIII).3.2-4)。また、クラウディウスの時代にガリア・コマタ出身者が元老院に迎え入れられた時、最初に候補に挙がったのはアエドゥイ族である(タキトゥス『年代記』11.25)。ただ、どういうわけか、エウメニウスたちはアエドゥイ族が元老院議員を出したことについては沈黙している。また、アエドゥイ族からドゥムノリクスやユリウス・サクロウィルのような反抗者を出したことも、当然、不都合な事実として無視されている。オートン人たちが引き合いに出すもう一つの過去は、「ガリア分離帝国」の時代に本家のローマ帝国を支持した結果、制圧されたという事件である。こちらの方は、ほんの一世代程度昔のことであり、その記憶はまだ生々しく残っていたと思われる。オートン人たちは、テトラルキア時代の厚遇の根拠に、遠い祖先の時代からのオートン人によるローマ帝国への奉仕と忠誠

を持ち出している。そうすることで、現在の特権的な地位とトリア宮廷の皇帝との友好関係に歴史的な基盤と正当化の必然性を与えているのである。ただ、利用可能な過去は共和政時代の故事と一世代前の内戦の記憶のみだったようであり、その間はないことが現実の関係を物語っているようにも思える。

「ローマ化」との関連で言うと、エウメニウスたちの演説はガリア人の文化的達成を記すものである。事実、ディオクレティアヌス時代の称賛演説は、北方大陸部ヨーロッパのガリア人が残した最古のラテン修辞学作品である。キケロからは野蛮人扱いされたガリア人だが(『クイントゥス宛書簡』1.1.27)、そのキケロの作品を含むラテン修辞学を学ぶことで、ガリア人も3世紀にはこのような水準に達することができた<sup>20)</sup>(ヒスパニアやアフリカと比べると遅いとも思われようが、更に北にはブリタニアという最後発地帯があることも忘れてはならない)。別の無名氏弁論家は、ローマ市の人のように流暢にラテン語を話すことは私たちガリア人には難しいと述べていることから(*Pan. Lat.* XII(IX).1.2, 313年イタリア遠征からトリアへ戻ってきた皇帝コンスタンティヌスを前にして読まれた)、それほど易しい仕事ではなかったのかもしれないが、少なくともガリアで帝国行政府やエリート同士の間で意思疎通するには十分な域に達している。古典作品に基づく教育から習得した、型にはまっていなさか文語的なラテン語は、行政官や文人エリート同士の共通言語であった<sup>21)</sup>。こうした教養言語が大きな意味を持つのが帝政後期・古代末期の政治文化の特徴である<sup>22)</sup>。オータンの存在感は4世紀に入ると急速に薄れていくものの、4世紀半ば以降、ボルドーのアウソニウスのように、ガリア南部の修辞学者・雄弁家たちがこうした背景のもとで跳躍台を得た。3世紀末のオータン人はこうした動向の先駆けなのかもしれない。

ただ、エウメニウスたちの時代には、100年後とは異なり、外民族の問題はそこまで激化しておらず、ローマ帝国行政府の存在感と実効性は揺らいでいなかった。エウメニウスたちにとって、外民族とは、少なくとも称賛演説の美文が語るところでは、ローマ軍によって打ち倒されたかあるいは打ち倒されるべき外敵、ないしは潜在的なローマ軍兵士の補給源である。そして、自分たちは栄えあるアエドゥイ族の末裔であり、オータン市の名士であり、帝国の文人にして官吏である。表面上、そこに矛盾や葛藤はない。エウメニウスたちの自意識においてアエドゥイ族の人間であることとローマ帝国の都市エリートであることとの間に深刻な問題が発生することはなかったろうし、後代のシドニウス・アポリナリスが直面したような問題とは無縁だったろう<sup>23)</sup>。また、エウメニウスの世代はぎりぎりのところでキリスト教に直面せずに済んだ。しかし、文献史料から彼らの意識の変化を調べることは不可能である。ラテン修辞学などとは縁のない一般のオータン市近隣の住民の考えに至っては、なおさら知る術がない。もしかすると、彼らにとってローマ帝国の存在は、そもそもアイデンティティに関わるような問題とはまったく認識されておらず、厄介な地主の総元締め程度にしか思われていなかったのかもしれない。それでも、遠くから運び込まれた物質文化を好んだり、実質的で現実的な利益には敏感に反応したのかもしれない。だが、こうした議論には、

より広い枠組みを設定し、考古学の成果や社会・文化理論の助けを導入することが必要であり、もはや文献史料の検討だけではどうにもならない。

### 校訂と翻訳, 参考文献

ここで底本として使用したのは Mynors による OCT のものである (R. A. B. Mynors, *XII Panegyrici Latini*, Oxford, 1964)。近年の校訂として他には、下記 Budé 版と、Teubner 版 W. A. Baehrens, *XII Panegyrici Latini*, Leipzig, 1911、および V. Paladini and P. Fedeli, *Panegyrici Latini*, Rome, 1976 (これは訳者は未確認) がある。特に注記しない限りは OCT のテキストにしたがって翻訳した。

近代語の翻訳および解説・コメンタリーには仏語、英語の以下 2 種類があり、適宜参照した。

E. Galletier, *Panegyriques Latins*, 3 vols. (Budé) Paris, 1949-55, vol.1 pp.101-138.

C. E. V. Nixon and B. S. Rodgers, *In Praise of Later Roman Emperors: The Panegyrici Latini*, Berkeley, 1994, pp.145-177.

他に関連する主な参考文献は以下の通り。

A. Klotz, 'Studien zu den Panegyrici Latini', *RhM* 66, 1911, 513-72.

R. Pichon, *Les derniers écrivains profanes*, Paris, 1906. (第 1～2 章 pp.36-150 が *Panegyrici Latini* の分析に当てられている)

R. Rees, *Layers of Loyalty in Latin Panegyric AD289-307*, Oxford, 2002. (第 4 章 pp.130-152 がエウメニウスの演説を論じている)

R. Van Dam, *Leadership and Community in Late Antique Gaul*, Berkeley, Los Angeles, London, 1985. (ガリア社会の考察と併せて pp.7-56 参照)

後藤篤子「古代末期のガリア社会」『ヨーロッパの誕生』(岩波講座世界歴史 7) 1998 年, 159～86 頁。

H. I. マルー『古代教育文化史』横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳, 岩波書店, 1985 年 (帝政後期のより広い文脈を論じている 351～375 頁を参照のこと)。

### エウメニウスによる学校再建を求める演説

[] 内は訳者による便宜的な補いや説明である。

OCT の校訂に従いつつ、2 種類の翻訳や二次文献を頼りに訳を試みたが、訳に自信が持てない箇所や、エウメニウスの意図を汲み取れなかった箇所も多いことを、また 2 種類の近代語訳の解釈が理解できなかったこともあると、告白しておく。また、古典作品からの引用と

それがもたらす効果については、記者には検討しきれなかった。

1.1. 総督閣下<sup>24)</sup>、あらゆる類の演説におけるその優れた能力の故に常なる信望を得た閣下ご自身はともかく、今周りにいる人々のほとんどは驚くのが確かだと私は思います。というのも、若い青年時代から今日というこの日に至るまで一度もそのような場で演説をしたことがなく、労苦と入念さによって私が得たと思われているものがどんなに小さなものであるとしても、フォーラムで激しく議論するよりも個人的に修練する方を欲したこの私が、今ついに、言ってみれば遅まきの新兵として私にとっては不慣れなその演壇に登ろうというのですから「驚くのが確かだと思えます」。2. そのために、その公正の座は私にとって何事かを為したり演説をしたりするのに最も壮麗であると思われるのに、私は自分の才能に自信を失ってこれまで身を遠ざけていたということを、そして、まさに今この時にも、訴訟での争いとは全く異なった様式の演説を行おうとしているにもかかわらず、自覚による震えから自分が躊躇しているということを、私は告白いたします。

2.1. それ故、人々の考えやこれから行う要求の説明に対して何らの疑念も残さないようにしましょう。その要求というのは、私の故郷のマエニウス学校<sup>25)</sup>の再建に関するもので、誰かに任せるより私自身が引き受けるべきと思ったのですが、自分にできると思う以上の事柄を自分が請け合ってしまったようにも思われます。2. 演説の初めに私はまず聴衆に対して次の事を確かにしておきたく存じます、この演説の仕事は一時的なものであり、またそれ自体が私の関心事にとりわけ適合するということを、そして、別の名誉を熱望するが故に私の知らない法廷弁護人たちの学派の方に移るのではない、ということを。3. といいますのも、このフォーラムでの討論とあの私たちの内密の勉学の訓練との間にどれほどの相違があるかを知らないほど、私は無関心や図々しさに満たされてはいませんから。[フォーラムでの討論という] あちらで才能に武装をさせてこちらで戦い、あちらで予行演習をしてはこちらで戦闘を始めます。4. こちらではほとんどまるで杭や岩で「戦う」かのように、あちらでは輝く投げ槍でもっていつも争われます。こちらでは言わば汗と砂塵にまみれ、あちらでは勲章のついた衣服によって、演説家は称賛されます。そのため、もし双方が経験のために職務を交換するなら、一方はラッパの音や武器の喧騒によって、もう一方は凱旋の見せかけによって怖気づくことでしょう。

3.1. 総督閣下、言明いたしますが、私はこうしたことを知っていますし、知りながら自分を偽るのでもありません。それ故、教示し指導する術を後に残して、自分が適任で資格があると考えるところか、一日で、たった一つの事柄についてフォーラムで語ろうというのですから、そのこと自体に対して名誉よりもむしろ容赦を願いたいほどです。2. 総督閣下、たとえこの演説において演説の新奇さではなくただこういった場に不慣れであるために私が動揺しているとしても、私が要求していることは、敢えて反駁して阻止しようとは誰も思わないようなことです。それどころかむしろ、<sup>プリンケプス</sup>元首たちの神のごとき鷹揚さや、その町「オータ

ン]の復旧、そして最良の技芸を祝うことが好ましくまた喜ばしいことであるような人たちなら、誰もが最大の喜びと好意で認めてくれるようなことなのですから。といいますのも、他の建物や神殿が修復されているのと同様に、かつてそのこの上なく美しい建物と勉学研究の豊富さの故に称賛され高名であったあのマエニウス学校を再建していただきたいのです。3. ですから、この場が私にもたらす不安も、演説をする理由が同じだけ軽くしてくれます。4. ですが、総督閣下、私はその理由を二つの部分に分けるべきだと思います。まずは、あの建物がかつての壮麗さを取り戻すことがいかに有益でありかつそうせねばならないかを論じ、それから、どういう理由から、公的な出費もなく、偉大な元首<sup>プリンケプス</sup>たちの贈与によって、また同時に故郷に対する私のいくらかの熱意と愛とともに、その実現が可能となるのか[を論じたく思います]。

4.1. 総督閣下、それ故に何よりもまず、我らが皇帝<sup>インペラートル</sup>ならびに副皇帝<sup>カエサル</sup>陛下らの神のごとき先見と、この建物の復旧のために私たちに示された特別な好意に従うべきです。パタウィ人<sup>26)</sup>の反乱[ガリア分離帝国の反乱]の略奪行為に悩まされてローマの元首<sup>プリンケプス</sup>[クラウディウス・ゴティクス]に援助を求めた時、長らくローマ人の兄弟<sup>27)</sup>という名を誇っていたその町[オータン]はその時ついに非常に深刻な損害によって打ち砕かれたのですが、その時の功績に対する称賛のみでなく、同時に災いに対しても悲嘆の念を抱かれたが故に、陛下らはその町を建て直して復興しようとなさいました。その時の破滅の大きさでさえ、陛下らの鷹揚さを記す不滅の記念碑にとって相応しいものであるとお考えになったのです。復旧の規模が大きければ大きいほど、再建者たちの栄光もより輝かしいものになる、と。2. そこで、多額の金銭と、そしてもし必要なら国庫全てとを、復旧さるべき神殿や公的な場のためのみでなく、個人の住宅に対しても陛下らは寛大にも与えてくださっています。3. 金銭だけでなく、海の向こうの[ブリタニアの]職人たちを、属州の中でも最も名高い階層から新しい住民を、そして、今まさに陛下らが遂行しているこれらの戦いでは[当面のところ]その不屈の体力を必要としてはいない最も忠実な軍団の冬営場所をも、[与えてくださいました]。[その軍団の兵士たちは]、私たちの利得のために、客人が感謝をする時のような熱意で従事し、滞った水と新しい水流をいわば疲れきった町の乾いた内臓に注ぎ込んでいます。

5.1. そのことから、その植民市を全帝国からのこれほどの資力でもって励まし勇気づけようと決定された陛下らが、特に自由人に相応しい教養を得るためのあの座の再建をお望みになったことは明白なのです。その勉学への敬意の念を明らかにして、きわめて高貴な青年たちをそこに特別に集めるよう配慮して下さったのでしょうか。2. といいますのも、雄弁術<sup>ドミヌス</sup>の教授と勉学が栄えるようにとの、最善にしていとも好意ある現在の人類の主らによるこの配慮と同じだけの配慮をかつて古の元首<sup>プリンケプス</sup>たちのうちの誰が備えていたのでしょうか。3. 誓いと情愛に関わる限り、陛下らを私たちの子供らの親と呼ぶことを私は躊躇いません。優れた教師の死によって失われた陛下らの全ガリアの中でも最も高貴なその才能のために配慮しようと決心された陛下らは、特に自らの判断からそこに教師と指導者を分配し、至上の国家運営

にとってはるかに重要である備えのために皇帝陛下が諸々の采配を振るわれる中でも、文芸の〔教師の〕徴募をもなさいました。4. 騎兵隊や護衛隊の利益に意を用いる場合と変わらぬほど、特に誰を長に任ずるかを陛下らは自ら決定するよう計られました。どのような演壇をも望め、時には神聖な審理の務めや、あるいはもしかすると宮廷での長官の職に出世すべきであるような者たちが、あたかも突然の曇り空に青春の流れの只中で捕らわれたかのよう、疑わしい弁論の旗を追っていかないように、とのご配慮です。

6.1. 総督閣下、その点において私は自分の称賛のためには何も割り当てません。しかし、まさに青年の第一人者<sup>プリンケプス</sup><sup>28)</sup>にして我らが主たるコンスタンティウス陛下<sup>ドミヌス</sup>が示された、全ガリアの青年たちのための信じ難いほどの配慮と好意を十分に感嘆することが私にはできないのです。2. 陛下〔コンスタンティウス〕はこの尊重の念からも学問の名誉を高められ、私はむしろ自分の息子のために私の以前の研究へ近づく機会を求めていたのですが、その私自らに再び雄弁術の教授を手がけるようにとお命じになりました。そして、私の生来の気質故、確かに小さな声ではありますが、それでも天上の神のもののように感じられる元首<sup>プリンケプス</sup>たちの言葉を伝えるものであるこの声を、神聖な内陣の内奥〔宮廷の内部〕からムーサ女神らの私的な至聖所へと移すという、この義務を陛下の父君〔義父マクシミアヌス<sup>29)</sup>〕の宮廷にも持ち込まれました。3. とにかくその理由というのは、この上なく高い名誉ある地位の代わりとしては十分であると分別ある者ならば考えて当然、というほどの評価をもってして陛下が考慮してくださっているこの私から（嫉妬を招かずにこのようなことを言えましょうか）、その職〔雄弁術の教師〕に任命することで何かしらを奪い取ろうとお望みであるから、などというものではありません。そうではなく、その職〔雄弁術の教師〕に対し私がこれまで担ったその名誉〔マギステル・メモリアエとしての名誉<sup>カエサル</sup>〕故に威信を加えるためなのです。4. ですから誰にとって疑念があるでしょうか。かの副皇帝陛下の神のごとき精神が、これほどの熱意からこの青年たちの集まる場に教師を選び出し、その訓練のために捧げられた場所を再建し整備するようにと望んでおられるではありませんか。あらゆる事柄の信奉者や保護者も、もし自分たちが手に入れようと努めるまさにその栄光のための神殿を建てなければ、自分の祈願と良心を不十分にしか満足させられないと思っているのだから、と。

7.1. そうした理由から、アテナイ人の人間性が慈悲の女神ミセリコルディアの祭壇を設置し<sup>30)</sup>、ローマ人の将軍の魂の偉大さが武勇の女神ウィルトゥスと名誉の神ホノルの神殿を建てたのです<sup>31)</sup>。2. というのも、そうした学芸へのまたは魂の働きへの熱情が備わっているような偉大な人々は、それらに捧げられた記念碑が後世の人々に対して姿を示すことをも欲したからです。3. フラミニウスの競技場にムーサ女神らのヘラクレス神殿をかのフルウィウス・ノビリオルは監察官の資金から建てました<sup>32)</sup>。そうしたのは、単に彼が文学や最高の詩人〔エンニウス〕との友好関係に促されたからというだけでなく、彼がギリシアで最高司令官であった時にヘーラクレス・ムーサーゲテース<sup>33)</sup>、つまりムーサらの同行者にして導き手が存在することを耳にしたからでもあります。その同じフルウィウスが最初にカメーナ女

神<sup>34)</sup>の9体の、つまり全員分の、神像を、最も強力な神性<sup>35)</sup>の保護の下、アンブラキアの町から移して奉獻しました<sup>36)</sup>。実際にそうであるように、ヘラクレスの守護によってムーサたちは平穏を、ムーサたちの声によってヘラクレスは勇気を得るというように、この神々はお互いの助力と見返りによって支えられかつ飾られねばなりませんから。

8.1. したがって、ヘルクリウス<sup>37)</sup>たる<sup>カエサル</sup>副皇帝陛下〔コンスタンティウス〕は、祖父であるヘラクレスと父であるヘルクリウス〔マクシミアヌス〕からこれほど靈感を受けて、好意から文学の研究に名誉を与えてくださっているのだと私は思います。正しく物事を為す訓練に劣らず良く話すことの訓練も陛下の神性の先見に関わるとお考えになるほどに、2.そして、永遠なる精神の神のごとき洞察から、文学は節制、慎み、用心、そして忍耐の教師であるが故に、あらゆる美德の基礎であるとお思いになるほどに。といいますのも、若い時に習慣となったことは全て、その後の人生のどんな職務においても、それらとは正反対のように思える軍務や陣営での任務においても、増していくものなのです。3. またそれ故に、あらゆる勤勉とあらゆる称賛のこれら乳母たち、またはより正しく言うなら母たちに、ヘルクリウスたる<sup>カエサル</sup>副皇帝陛下は教師を公示することが相応しいとお考えになったのですから、その本来の住まいを造り直すことを陛下が熱望していることも必然です。かつての堅固さと洗練さを取り戻したあかつきには、ここではるかに正しくかつ公正にヘラクレスとムーサたちの神殿とそう呼ばれるように、と。

9.1. 総督閣下、これほど多くの勝利と凱旋によって偉大なる<sup>プリンケプス</sup>元首たちが手にする栄光にも関わることなのですが、その偉大さたるや、陛下らの称えらるべき武勇によって磨かれる詩才が、個人の家の中ではなく、公の表明とその都市〔オータン〕自らの相貌において活気づけられるほどです。2. しかしながら、ここへおいでになる不敗の<sup>プリンケプス</sup>元首らのまさに通路に建てられているこのマエニウス学校の他に、何かこの町〔オータン〕の姿と容貌に備わっているものがあるでしょうか。陛下らが与えてくださる鷹揚さのみでなく、青年たちを教育するようにと私を励ましてくださるその書簡によっても、喜んでいる青年たちが陛下との面会を求めて赴いたことによって陛下らご自身が心を動かされたと述べておられるのですから、その青年らの集まる場が再建されたのをご覧になれば、どれだけなおいっそうお喜びになるでしょうか。3. 総督閣下、さらに、その建物はより輝かしく、そして<sup>カエサル</sup>副皇帝陛下らと同じく、さらにあらゆる人にとっても、より目につきやすいものになっているのです。あたかもこの町の目の間に、すなわちアポロの神殿とカピトリウムの間に置かれたかのように、特別な場所に位置しているのですから。4. それ以上に、その極めて神聖な座は、この町の中にある他の何よりも美しい聖域が、その中間部分の倒壊によって長らく損なわれることのないように、その双方〔アポロ神殿とカピトリウム〕の煉瓦が隣接しているが故に尊重さるべきであり、また双方の神性への配慮から復旧さるべきであります。特に、このマエニウス学校を最初に建てた者は、自身に近しい神性のまるで近親者のもののような抱擁によって支えられるようにと、その学校を特にその場所に位置づけたのだと私には思われますから<sup>38)</sup>。なぜな

ら、学芸のために奉献された最も荘厳な神殿を、そこではアテナイの創建者たるミネルウァ女神が、ここではカメーナ女神たちの中心にいるアポロ神が、目にしているからです。

10.1. したがって、教育に親しい神性がこれほど近くにある場所では、これほど近くから神聖な精神〔ミネルウァ〕が知恵を、詩歌の神〔アポロ〕が声を、永遠の乙女〔ミネルウァ〕が慎み深さを、そして未来を予知する者〔アポロ〕が先見を手助けしてくれる場所では、特に青年らの詩才を訓練することがとりわけ当然であり正当なのです。2. 父たるユピテル神と仲間であるミネルウァ女神、そして宥められたユーノー女神が、いわば自分たちのものである祭壇の前でヨウィウスたちとヘルクリウスたちとが賛美されるのを耳にするような場所で、あたかも儀式の祈祷のように私たちが音頭を取っているのですから、立派な青年たちも偉大な元首たちの業績を称えることを学びますように（といいますが、それ以上に良い雄弁術の使い方などあるでしょうか）。3. 総督閣下、私が最初に話すべきだと決めた事柄について、私は十分に言葉を尽くしたと思います。すなわち、最善なる元首たちがとりわけ好意を示しておられるその勉学のために捧げられ、この町のまさに前面に位置し、最も有名な神殿に両側から接しているその建物〔マエニウス学校〕の復旧がどれほど有益でまたそうせねばならないか、ということについて〔言葉を尽くしたと思います〕。

11.1. 今からは、二番目の、同時により重要な箇所へと私が先延ばしにしていた事柄を、つまり、公の出費もなく、神聖な贈与への称賛を伴いながら、いかにしてそれが可能となるのか、ということを説明しましょう。2. いとも鷹揚なる元首たちは私にこの国家の財力から60万セステルティウスで給金を受け取るように命じられました。以前にもその後にもはるかに大きな恩恵を私に与えてくださったのだから、それ以上を私の利益のために授与することを陛下らが望まなかったからではありません。私が神聖書記局長官<sup>マギステル・サクラエ・メモリアエ</sup>として受け取っていた30万セステルティウスを、この私的な教職への敬意から同じ分の割り当てを加えて倍にしようという意図なのです。3. 私はこの給金を、顕職に関わる限り、敬意をもって受け取り、収入の勘定に書き入れます。ですが、その出費を私の故郷へ戻して、必要のある限り、この建物の再建にあてがうことを私は望むのです。その私の意志の理由をたとえ擁護するべきではないとしても、今、閣下のご好意のもと、周囲の人たちも期待し私の言うことに耳を傾けていると思いますから、ある程度まではこのまま続けたく存じます。

12.1. なぜなら、何よりもまず、その恩恵の最大の収益は、それを与えられるのに私たちが相応しいと思われるようになるという、この点にあると私は思うからです。実際、良かれ悪しかれ何らかの手段によって手に入れたお金を使うこと自体は特異ではないしありふれていることですから、むしろ立派な手段によって手に入れることができるということが、たとえ閣下が利得をお返しになるとしても、最大の利益なのです。2. というのも、シリアやデロス島やインドの商人は称賛というなにより実りの多い収益を得ようと努力することはありますが、良心の報いで満足する財というものは稀であり、かつごく少数の人々の間のみ見られるものです。確かに、獲得しようという熱望に駆られてそれを手にしたのだとは思わ

れないという、まさにこの点に恩恵の榮譽は結びついています。私たちにその達成ができるのは、ただ私たちが差し出されたものを受け取ったものであるとみなす場合のみなのです。手に入れる機会に到達できたということは勤勉に、それを顧みなかったということは自制に属する、というように。

13.1. あるいは、もしいとも勇敢なる男たちが神聖な競争において、多大な労苦を払いその上生命を危険に晒してまでして、ただ伝令人の声と冠の証明を得ようとするのなら、かくも偉大なる元首たちが青年たちの教育を私に任せることをお決めになったその神聖な言葉と天上のもののごとき書簡とを、私は持てる声の力を振り絞って敬意を表し受け止めるべきではないでしょうか、あるいは、あらゆる月桂冠以上に尊重すべきではないでしょうか。2. 総督閣下、たとえこの許可をも閣下が私に与えてくださるに違いないとしても、私はそれらを…[欠損が認められる]…します。というのも、書簡を読み上げることで、文芸そのもののみでなく文芸の神殿と住まいのためにも私がどれほどの熱意を向けることが正当であるかをより明瞭にするためには、朗読への承諾なしにその神聖な書簡をただ引用するというのは正当なことではありません。

14.1. [以下、宮廷から届いた書簡の引用]「我らのガリア人たちは、アウグストドゥヌム人らの町におけるその生活が自由人に相応しい学芸によって教化されている彼らの子供たちのために、また、イタリアから引き返してくる余、副皇帝コンスタンティウスの随行団<sup>カエサル</sup> 40) を快く同意して受け入れたその青年らも、彼らの才能のために、我らが配慮せんとするに値する。2. それ故、フォルトゥナ女神が与えることも奪うこともできないようなものの以外に、我らがこの者たちに与えるべき恩恵が何かあるだろうか。3. そこで、教師の死によって失われたと思われているこの学校に対して、我らの公務を執り行ううちにその雄弁と性格の謹厳さが確かであると知るに至ったことから、特に汝をその長に任せねばならなかった。4. 故に、汝の頭職の特権を損なわせることなく、汝は雄弁術の職を再開し、我らがかつての栄光を取り戻させたことを汝も知らないではない上述の都市[オータン]において、より善き生に専心するよう青年らの精神を教化すべしと、我らは促す。この職務のために汝がかつて得た名誉が何らか損なわれると考えてはならない。誉ある職業は威信を減ぼすというよりむしろその全体を飾り立てるのだから。5. そして最後に、我らの慈悲も汝の功勞に配慮しているのだと汝が理解できるように、汝は国家の財力から60万セステルティウスで給金を得ると我らは定める。我らが親愛なるエウメニウスよ、健やかであれ。」

15.1. 総督閣下、かくも偉大なる元首らのこの励ましによって、閑暇のために横臥していた私の精神がかつての学芸に向かって立ち起こされているのみならず、古の学校の壁と屋根もまた徐々に立ち上がりつつあるのが閣下にもお分かりではないでしょうか。2. というのも、アンフィオーンの歌という、かつて岩が従ったと言われるそのばちと豎琴の甘みさは、旋律が導く時には[岩が]動かされ、歌の止む間は立ち止まりながら、あたかも芸芸によるかのように自発的に壁を築いたほどなのですが<sup>インペラートル</sup> 41)、それでも、皇帝ならびに副皇帝<sup>カエサル</sup> 隆

下らのこれらの書簡の中に、魂のあらゆる躍動と物事の成就を駆り立てるような力と刺激とが備わっているという事実に匹敵するでしょうか。3. 陛下らは命令することができることで、促すようにする方が相応しいとお考えなのです。陛下らが黙していてもその容貌だけで表された意思には、誓約を確かなものとするそのうなずきを世界中の震えが感じ取る最上の父〔ユピテル神〕の権威が伴うのですが、それでも陛下らは自ら進んで、命令するという権能を励ますという人間性によって受け入れやすくするのです。4. それに、むしろ陛下らは称賛によって促すのです。性格の謹厳さと演説の能力をご自身が吟味し確認したと公表し、宮廷での顕職の特権を雄弁術の職に対しても損なわれず傷つくことがないままで維持して下さるのですから。5. 私はそれらの神のごとき寛大さの誘惑によって、たとえ以前には自覚をまるで欠いていたのだとしても、どの程度であれ確かに理解するようにと動かされ導かれるでしょう。本当に、かくも偉大なる元首<sup>プリンケプス</sup>らが一人の人間をこれほどの称賛で飾るということは、雄弁家であることを思い起こさせるのではなく〔雄弁家を〕作り出すということですから。

16.1. それでは、その支払われた金銭でもって私は何をすべきでしょうか。いやむしろ、これらの神聖な証言〔宮廷からの書簡〕をあらゆる富や神々の恩恵よりも優先させるのだから、ミダス王やクロイソス王、または黄金を流したと伝えられるパクトロス川ほどの財産があつたとしても、何をすべきだというのでしょうか。2. その発言のみならず、うなずきまでもが撤回不可能な、ヨウィウスたちとヘルクリウスたちが布告なさる事柄よりも、ソクラテスの傑出した英知を告げたかのピュティアの歌の方が輝かしく正しいものであると思われるのならともかく、そうではないのならば〔その支払われた金銭でもって私は何をすべきでしょうか〕<sup>42)</sup>。3. そのために、総督閣下、私が申しましたように、顕職に関係する限りにおいて、その60万セステルティウスは受け取るべきなのです。しかしながら、現実と実際のところは、故郷と、特に私たちの勉学が行われるべきであるその建物とに、私は譲渡します。4. なぜなら、神聖な書簡に含まれている事柄、すなわち私の顕職の特権を保ったままで教授すべし、というこの点を、より紛れのないより明白なやり方で保持するためには、永遠の元首<sup>プリンケプス</sup>らのこのような判断に私が相応しいということを国家への愛に照らして証明するのがよいと私には思われるからです。5. 私自身に関しては、建物の再建のために命令と資力を出して下さった陛下らの安寧のために何度も繰り返して私の魂を捧げるほど、どこへ目を転じて、個々の建物の再建に対し喜びの念に堪えないのですが、それほどにその町〔オートン〕への愛のために私が燃え上がっているということについて、故郷の神々を証人として呼び求めます。

6. ですが、私の職を飾り立てるためにこのようなことが私に認められたのも、特にこの記念碑的な建物に負っていると私は感じるのです。17.1. なぜかというに、もしも、戦争で手に入ったものをマルス神に、海で獲得したものをネプトゥヌス神に捧げ、収穫をケレス女神に、収益をメルクリウス神に供えるならば、それと同様に、もしもあらゆるものの果実をそ

れを生み出す神の祭礼へと返すのならば、演説の座以外のどこで教授することの報酬を捧げることが正しいと言えましょうか。2. 特に、私にとっては、他の人々と共通である勉学への畏敬の念以上に、マエニウス学校に関しては、私の祖先たちの記憶から、特に重んじるべきところもあるのですから。3. というのは、たとえ私が少年期に入るよりも以前に勉学の訓練のための彼らの集いが中断されていたとしても、そこでかつて私の祖父が教鞭を執っていたと聞いているからです。祖父はアテナイの出身であり、ローマで長らく名を博し、それから、その町〔オータン〕で人々の学問への愛を知り確認したことと、この建物自体への尊敬の念から、引き留められたのです<sup>43)</sup>。4. 彼らが言うように、祖父が齢80を越えても教えていたというその場所を、もし私がその尊ぶべき老人によって再開し飾り立てられるようにしたならば（グラウクスよ、私たちが眼前にしているあなたのことを、生まれた町ではなく雄弁の故にアッティクスと呼びかけることにします<sup>44)</sup>）、祖父の職をこのような形で受け継いだために祖父本人を生へ呼び戻したように私には思えましょう。5. 確かに、総督閣下、復旧さるべき世界における自らの公への忠誠心を、各人が自らの理解に応じて、更新さるべき自身の一族の足跡において競い合うことが、我らが皇帝<sup>インペラートル</sup>ならびに副皇帝<sup>カエサル</sup>陛下らご自身にとって好ましいことであると信じないならば、私は私の家と一族の名誉のためのこの私の熱意を明らかにしようとは思いませんから。

18.1. といいますのも、先祖たちの没落によってかつて衰退したあらゆるものがこの時代の幸福によって再び立ち上がり、長い間森に覆われ野獣の住処となっていた多くの町々が周壁によって再建され、住民で満たされるのを目にしているのに、たとえどんなにわずかなものでも、自分の血族の記憶を呼び覚まし、自分に対する何らかの好意的な評価を得ようと望まないほどに、小心で落胆し、あらゆる称賛への欲求から無縁であるような精神を、今誰が抱えているのでしょうか。2. 潮流によって隠され彷徨っていたデロス島が突然出現するということがエーゲ海で一度起こったといいます<sup>45)</sup>、今、それと似たようなことが、至る所で生まれ来るかくも多くの町々において、あたかも人間的な生活様式へと再生しつつあるかのような島々において、生じているのですから。3. 底知れぬ罰の深淵から解放されローマの光の視界へと浮かび上がってきたブリタニアが<sup>46)</sup>、オケアヌスによって覆われ隠されている場合と変わらぬほど深刻な破滅によって沈没させられているか、または、今やっと野蛮人のものであることをやめたこの地<sup>47)</sup>が、周りを流れる川の流れと岸辺を洗う海によって閉じ込められてしまった場合とさして変わらぬほど、フランク族の野蛮さによってあたかも飲み込まれてしまったかのように沈んでしまっているのならともかく、そうではないというのなら〔小心で落胆し、あらゆる称賛への欲求から無縁であるような精神を、今誰が抱えているのでしょうか〕<sup>48)</sup>。4. というのも、レーヌス川〔ライン川〕、ヒステル川〔ドナウ川〕、そしてエウフラテス川〔ユーフラテス川〕の全防衛線において建て直された騎兵隊と歩兵隊の陣営を、なぜ私が列挙する必要があるでしょうか。かろうじて発見された昔の土台の跡に至る所で城壁が築き上げられているのと同じだけ、手によって植えられた樹木が春

または秋のこれほどの温和さによって大きくなり、雨によって押し潰された作物がこれほどの太陽の熱によって再び立ち上がっています。5. 事実、かつてサトゥルヌスが王であった時にも長くは栄えなかったあの黄金の時代が、今ユピテルとヘラクレスの永遠の加護によってそれほどに再生しているのです。

19.1. ですが、総督閣下、元首<sup>プリンケプス</sup>らの武勇と幸福によって再び生み出されているあらゆるものの中でも、たとえ重要さと有益さの点ではおそらく他にもっと重要なものがあるとしても、励まし称賛すべき文芸の研究のために陛下らが分け与えてくださるこの鷹揚さ以上に感嘆すべきことなど、事実、何もありません。2. といいますのも、私が最初に申しましたように、以前の元首<sup>プリンケプス</sup>たちの誰一人として、戦争の義務とこのような平和の誉れとに同じだけの配慮から関心を払ったことはなかったのですから。3. 実際、まったく正反対にそれぞれの方向へと向きを変え、その精神の性質は異なり、選択の際の判断も一致しません。結局、その双方の技芸の指揮を執る神性の警告は不調和なものであり、その性質も似てはいないのです。4. ですが、それ以上に陛下らの武勇と人間性は新しくかつ信じ難いものなのです。陛下らは戦争においてこれほどの働きを為す中でも、このような文芸の訓練に対しても配慮を示され、私たちも読み知っているような、かつてローマ国家が陸と海において最大の勢力を誇っていたその時代の状態は、ローマの権勢のみでなく雄弁もまた再び花開いた時に、それでようやく取り戻したことになるとお考えなのです。

20.1. それ故、総督閣下、私たちの生活の他の益をその援助者たる神々の前で拝むのと同じように、陛下らの学芸に対する類のない高い評価を古くからの学芸の座で称えるため、あらゆる武勇の誉れある最善の主<sup>ドミヌス</sup>たちから私に与えられたその贈与が、教育と雄弁とに捧げられたこの建物に与えられますように。2. さらに、あらゆる大地と全ての海、そして、町、種族、部族のうち何であれ、不敗の元首<sup>プリンケプス</sup>らがあるいは好意から復興させ、あるいは武勇をもって征服し、あるいは恐怖によって従わせるものを、その柱廊で青年たちが毎日眺め目にしますように。実際、その場所には、閣下ご自身もご覧になったと思いますが、耳で理解するのが困難なことでも目を使ってより明白に学べるように、少年たちの教育のためにあらゆる場所の地理、広さ、距離がその名前とともに、また、川という川がどこで流れを発し姿を隠すのか、海岸線の湾曲がどこでその向きを変えるのか、どこでオケアヌスがあるいはその周によって世界を囲みあるいはその躍動によって押し寄せてくるのか、描かれているのですから<sup>49)</sup>。

21.1. ペルシアの双子の川〔ティグリス・ユーフラテス両河〕とリビュアの乾燥した土地〔アフリカ〕、レーヌス川〔ライン川〕の傾いた角〔角状に分岐した支流、すなわち低地地方〕とニルス川〔ナイル川〕の多くの裂け目持つ河口が、勝利の報告者が興奮しながら常にやって来るたびに再び目にされる間は、最強の皇帝<sup>インペラートル</sup>陛下らのいとも栄誉ある業績が相隔たる諸地域の題材を通して思い返されますように。2. またその間にも、これら個々の地に目を向ける者たちの精神は、正皇帝<sup>アウグストゥス</sup>ディオクレティアヌス陛下、陛下の慈悲の下でエジプトがそ

の狂乱を捨てて静まったこと、あるいは、不敗のマクシミアヌス陛下、陛下がマウリ人の一団に雷を落として打ち破られたこと、あるいは、主たるコンスタンティウス陛下、陛下の右手のもとでバタウィアとブリタニアが森林と潮流の中からその汚れた頭を露にしたこと、あるいは、副皇帝マクシミアヌス〔ガレリウス〕陛下、陛下がペルシア人の弓と矢筒を踏み潰されたこと<sup>50)</sup>、こういったことをさらに思い浮かべるのです。3. なぜなら、そこに異質なもののなど何も見当たらない今のこの時には、ついに描かれた世界を眺めることは喜ばしいからです。4. 総督閣下、閣下は私の熱意と誓約の表明を手にしておられます。その表明を閣下の書簡によって神聖なる〔皇帝コンスタンティウスの〕耳許へと伝えることを煩わしいと思わぬよう、私は閣下をお願いいたします。といいますのも、正しいことを熱望する者たちにとって、自らの意思がかくも偉大なる元首らの神聖な認識のもとへ伝えられることこそが、最大にしてほとんど唯一の果実なのですから。

## 註

- 1) *Panegyrici Latini* という史料全体の説明については、Galletier, vol.1 pp.vii-lxx, Nixon-Rodgers, pp.1-37, および訳者による別稿（西村昌洋「テトラルキア時代ガリアにおける弁論家と皇帝：『ラテン語称賛演説集（*Panegyrici Latini*）』より」『史林』92-2, 2009年3月, 40～74頁）を参照。また、Galletier と Nixon-Rodgers によるエウメニウスの演説の解説も参照のこと（それぞれ pp.103-121, pp.145-150）。
- 2) テクストに収録された順に加え、便宜的に、年代上古いものから並べ直した場合の順番も併記することが多い。（）内の番号が古いものから並べた場合の順番である。エウメニウスの演説は正確な年代特定ができないので、OCT では4番目に古いことになっているが、本稿では Galletier, Nixon-Rodgers にならって5番目に古いと考える。
- 3) 名前の由来については下記註25 参照。
- 4) かなり以前にはこれら8篇全てがエウメニウスの手に帰されていたが（O. Seeck, 'Eumenius', *RE* 6.1, 1907, coll.1105-14), A. Klotz, 'Studien zu den Panegyrici Latini', *RhM* 66, 1911, pp.513-72 以後この可能性は退けられており、エウメニウスが作成したことが確かなのはこの演説のみである。
- 5) A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire 284-602: A Social, Economic and Administrative Survey*, Oxford, 1964, pp.50f., 367f.
- 6) E. Faure, 'Notes sur le Panégyrique VIII', *Byzantion* 31, 1961, p.18; F. Millar, *The Emperor in the Roman World*, London, 1977, p.503.
- 7) リュディアのヨハネスも532年頃に皇帝ユスティニアヌスに捧げる称賛演説の作成を依頼されたことがあるという（C. Kelly, *Ruling the Later Roman Empire*, Cambridge, Mass. and London, 2004, pp.11-14）。
- 8) 議論の大筋については Nixon-Rodgers, p.163 n.47 を参照。
- 9) 逆が真であると考えているのは、たとえば、Galletier, p.115 や G. Woolf, *Becoming Roman: The Origins of Provincial Civilization in Gaul*, Cambridge, 1998, p.2。
- 10) Galletier, p.103f.
- 11) Nixon-Rodgers, p.145f.
- 12) A. Klotz, op. cit., p.519.
- 13) Galletier, pp.106-8.
- 14) Nixon-Rodgers, p.148.
- 15) ディオクレティアヌス時代以降、属州は細分化され、数が増えると同時に領域は縮小していくのだが、この時点でルグドゥネンシス属州がどのような状態にあったのかは不明である。

- 16) B. Rodgers, 'Eumenius of Augustodunum', *AncSoc* 20, 1989, pp.249-66.
- 17) *Pan. Lat.* VIII(IV).21.2, IX(V).4.1, VI(VII).22.4, V(VIII).2.4. オータンの出身者は必ずこの点に言及する。
- 18) F. Millar, *op. cit.*, pp.84-5, 98-9.
- 19) 修辞学教師時代のアウグスティヌスの事例も想起せよ (『告白』 6.6.9, 6.11.19)。
- 20) R. Pichon, *Les derniers écrivains profanes*, Paris, 1906, p.36.
- 21) ギリシア語圏でも同様だが、ギリシア語の場合、その尚古趣味は更に著しい。
- 22) P. R. L. Brown, *Power and Persuasion in Late Antiquity: Towards a Christian Empire*, Wisconsin, 1992, pp.35-70.
- 23) 後藤篤子「シドニウス＝アポリナリスにおける「ローマニズム」」『史学雑誌』 91-10, 1982 年, 1～39 頁。
- 24) ラテン語では常に *uir perfectissime* と呼びかけられている。この *uir perfectissimus* とは騎士身分の公職者の称号で、属州総督クラスの者が帯びる。ここでは「総督閣下」で統一した。
- 25) テクストでは, *scholae Maenianae*, *haec Maeniana*, *illa Maeniana* などと表記されている。訳文ではさしあたり「マエニウス学校」で統一した。*Maenianae* という名称の由来は、マエニウス家の人物が最初にローマに導入したバルコニー状の構造を持つ建築様式からきているか、あるいは、ローマ市のフォルムに初めてロストラ（船嘴）を設置した人物の名ガイウス・マエニウスにちなんで修辞学の学校の名前にしたか（ロストラは後に演壇の呼び名になったから）、といった推測がなされている (Nixon-Rodgers p.152 n.5)。
- 26) *Bagaudicae Livineius*: *Batauce M.* 写本 M は、現在では失われた最初の発見時のマインツ写本のことであり、近年の研究者らにならい、こちらの読みを採用する。OCT では *Batauce* になっているが、*Batauca* であろう。*Batauca* が *Bagaudicae* に直されたのは、1581 年に Lipsius がここでバタウィ人の介入は不可能であると判断したことを受け、1599 年に Livineius がその推測を採用したからである。だが、貨幣の研究から、「ガリア分離帝国」の皇帝たちはバタウィ人と関連があり、この皇帝たちを支持した下ゲルマニアの兵士にはバタウィ人が混ざっていたことが今では知られている。もし、バガウダエの反乱ととると、オートンが「非常に深刻な損害によって打ち砕かれた」のはマクシミアヌスがガリアを訪れた頃のことになるが、「非常に深刻な損害」に相応しいのはやはり 269 / 70 年のオートン陥落の方であろう (Galletier p.111; Nixon-Rodgers p.154 n.12)。
- 27) 解説 7 ～ 8 頁を参照。
- 28) 「青年の第一人者 (*princeps iuventutis*)」は、帝位継承予定者に与えられる称号であり（最初の例はタキトウス『年代記』 1.3 のガイウスとルキウス）、コンスタンティウスは後に正皇帝マクシミアヌスの後を継ぐことになっているため、不自然な称号ではない。同時に、ここでは青年への教育に焦点が当てられているので、コンスタンティウスの示した青年と教育への関心を強調しているのかもしれない (R. Rees, *Layers of Loyalty in Latin Panegyric AD289-307*, Oxford, 2002, p.146f.)。
- 29) コンスタンティウスは 293 年にヘレナ（コンスタンティヌスの実母）と離縁し、マクシミアヌスの娘ないし連れ娘であるテオドラと再婚している。したがって、マクシミアヌスはコンスタンティウスの義父である。
- 30) Statius, *Thebais* 12.481-511. エウメニウスは述べていないが、この祭壇を建てたのはヘラクレスの末裔ということになっている。
- 31) 前 222 年マルクス・クラウディウス・マルケッルスによる（リウィウス『ローマ建国以来の歴史』 25.40.1-3, 27.25.7-9, 29.11.13 参照）。
- 32) マルクス・フルウィウス・ノビリオル、前 189 年にアイトリア人を破り、マルスの野にムーサ女神らのヘラクレス *Hercules Musarum* の神殿を建てた。
- 33) ここでムーサ女神らの導き手ヘラクレス *Ἡρακλῆς Μουσαγέτης* が出てくるのは、ヘルクリウスであるコンスタンティウスを守護するヘラクレスと、修辞学学校という学芸に関わる場所を守護するムーサ女神の双方に言及できるからであろう。
- 34) カメーナは本来は水精で、ムーサと同一視される。
- 35) 「神性 (*numen*)」。パネギュリクスでは頻出する語であり、皇帝ないしは神に付される。さしあ

- たり「神性」という訳語で統一した。
- 36) 大プリニウス『博物誌』35.66 参照。
- 37) 解説 2 頁を参照。
- 38) マエニウス学校の痕跡は残っていないが、アポロ神殿とカピトリウムの間に位置しているという証言から、現オートン市内の郵便局が建っている地点にマエニウス学校はあったことになる (Nixon-Rodgers, p.161 n.41)。
- 39) 解説 3 頁を参照。
- 40) 「随行団 (comitatus)」とは、皇帝と共に移動する、皇帝の側近、宮廷のスタッフおよび護衛隊から成る集団であり、「野戦機動軍 (comitatenses)」の語もこれに由来する。ただ、3 世紀末の時点で随行団がどのような構成をしていたのか、またそもそも随行団はこの時点で存在していたのか、確かなことは不明である。ここでは、随行団が存在していたという仮定に基づき訳をつけたが、この comitatus は宮廷スタッフ集団としての随行団ではなく、単に同行とか同伴という程度の意味の可能性もある。その場合の訳文は、「イタリアから引き返してくる余、副皇帝コンスタンティウスに同行することを快く同意して引き受けたその青年ら (ipsi adolescentes, qui hilaro consensu meum Constanti Caesaris ex Italia reuertentis suscepere comitatum)」となる。Galletier や Nixon-Rodgers は後者の筋の訳をつけている。
- 41) ロードスのアポロニオス『アルゴナウティカ』1.735-41, オウィディウス『変身物語』6.176-78, Apollodorus mythographus, *Bibliotheca* 3.5.5 参照。
- 42) 16.2 は文全体が Nisi forte で始まる条件節になっているようであり、これを受ける主節は前文の 16.1 だろう。18.3 で同じ用法が出てくる。エウメニウスが言わんとするところは、「テトラルキアの皇帝たちが下す決定は、ソクラテスに下されたデルフォイの神託よりも重要であるので、この度賜われることになった 60 万セステルティウスは是非受け取って、学校の再建のために費やすべきである」ということだろう。大言壮語や大仰な言い回しはパネギュリクスではよくあることなので、真剣に憤慨しなくてよい。
- 43) 解説 4 頁参照。
- 44) このグラウクスが何者なのかは不明である。297 年にコンスタンティウスにパネギュリクスを捧げた人の名前ではないかとか (C. Jullian, *Histoire de la Gaule*, Bruxelles, 1926, vol. 7, p.93 n.3), エウメニウスの祖父と同様にギリシアからオートンにやって来た修辞学者ではないかとか (Galletier p.135 n.4), 推測がなされている。
- 45) オウィディウス『変身物語』6.189-91, 332-34, 大プリニウス『博物誌』2.89 参照。
- 46) コンスタンティウスによりブリテン島が篡奪帝の手から取り戻されたこと。
- 47) 原文では haec ipsa としか書かれていない。ここでは「この地」と訳しておいたが、具体的に何を指しているのかは不明である。Galletier は、コンスタンティウスによってカラウシウスから解放されたスヘルデ川流域地帯やバタウィア地方ではないかと考え (p.136 n.2), Nixon-Rodgers は、この演説の時点でエウメニウスがいる場所であり、かつブリタニアと釣り合いが取れるだけの領域であるから、ガリア地方全体を指しているのではないかと想定している (p.169 n.71)。
- 48) 註 42 に同じ。18.3 全体が Nisi forte で始まる条件節であり、主節は 18.1 だろう。
- 49) このマエニウス学校には世界地図が掲げられていたらしい。
- 50) ここでテトラルキアの四皇帝の功績が言及されているのだが、どれも文学的で曖昧な表現でなされているため、コンスタンティウスのブリテン島再回復以外は、軍事行動 (特にマクシミアヌスのアフリカ遠征とガレリウスのペルシア遠征) がどこまで進行しているのか、読み取ることは難しい。